

私たちのPurpose (存在意義・社会への約束)は「より最適な医療と温かいところで“あなた”と“地域”を支えます」

独立行政法人 地域医療機能推進機構 (JCHO) 大阪病院 (大阪市福島区) 病院長 **西田 俊郎** (としろう)



JCHO大阪病院の基は、1952年に厚生年金保険法に基づいて設立された大阪厚生年金病院です。2014年に、厚生団・全社連・船保会加盟の病院が統合したJCHO(独立行政法人地域医療機能推進機構)57病院の一院となりました。JCHO大阪病院の西田病院長にお話を伺いました。

2020年にJCHO大阪病院の病院長として赴任される前は、国立がん研究センターの病院長をされておられたのですね。

国立がん研究センター東病院(千葉県柏市)で2年8カ月、同センター中央病院(東京都中央区築地)で4年、病院長をしておりました。その前は大阪警察病院で副院長を務めていました。「公」という言葉について深く考えるようになったのは、国立がん研究センターに行つてからです。厚労省直下の病院でしたので「公」ということを意識しました。国立がん研究センターは研究開発と国の施策を実施する独法でしたので、そのためにはデータが必要で、データを出せる組織づくりにも



尽力しました。がん対策をはじめ医療政策についても患者さんのためにどういった医療をどの様に提供すると良くなるのか。この11年位考え続けてきました。

JCHO Osaka our Purpose 完成! VisionそしてCredo

大阪病院ではどのような変革から始められたのでしょうか。

2020年4月、当院に来る前から、経営的に厳しいことは聞いていました。しかもコロナです。何が根本的な問題なのか、1年間見ました。経営改善、労務改善、教育・研究などしなければならぬところが色々ありました。それ以前にあまり職員が挨拶しない様な病院でした。決して悪気はなく、個々バラバラの状態でした。また、仕事に対し個々の職員が異なる価値観を持ち、違った方向を向いて仕事をしていました。

赴任時、新型コロナウイルスのパンデミックの中で危機管理が求められました。まず病院のガバナンスを変えました。そして職員のベクトルを揃えるために、「この病院の存在意義は何か、どんな病院に医療者になりたいのか」Purpose設定から始めよう。押し付けられた理念ではなく、自分たちで創造していく。「私たちは何を社会に約束し、どこに向かうのか」「私たちの大切にしている価値観はなにか」2022年1月「理念プロジェクト」が始まりました。

パーパスを考えるにあたり、職員が主体にかかわり、患者さん・ご家族・地域の住民・医療関係者等から集めた数多くの意見を基に、現状を分析し、言葉を作つては切り、重ねては剥しを繰り返して、紡ぎ編み出していきました。そして、最後の意見集約を職員全員で行い、ついに2023年3月1日にJCHO大阪のパーパスが完成しました。私達のパーパスは「より最適な

医療と温かいところであなたと地域を支えます」です。

そしてこのパーパス(存在意義や社会への約束)を基にして、ミッション(パーパスを実現するために目指し続けること)、ビジョン(私たちが2030年までに作り出したい状態)、そしてクレド(私たちが大切にしている価値観・行動基準)を創つていきました。

- ミッションは、
- 専門的で高度な医療を提供できる体制を保ち、
- 一人ひとりに寄り添い最適な医療を提供すること、
- 未来の医療を支える
- プロフェッショナルを育成すること、
- 変化する社会の要請・医療ニーズに真摯にかつ迅速に応えること、
- 職員が互いに支えあい高めあい、より良い医療を提供すること。

理念プロジェクトシーズンII 開始

ビジョンについては、必ず数値で表すようにと条件を付けました。シーズンIIのVISION for 2030は具体的に「平均稼働病床数450床」「救急搬送台数5500台」「職員満足度10%UP」となっています。

無論このとおりに行くとは限りませんが、皆で考え、取り組み、進化するのが大切だと思います。

職員の方向性が同じになってきたので、多少は経営状態が改善されてきました。本部でも理解してくれましたので、Davinci Xiを購入したり、最新の電子カルテを導入したり、脊椎のナビゲーションも入れたりとすることができました。

2024年は、患者・家族と共に地域と共に

大阪病院は今年、何を目指しますか。

患者さんやそのご家族と共に、病院のプロセスを見直してみたいと思つています。病院を知ってもらうために、オープンキャンパスや赤ちゃんが来た!、ART in Hospital等の様々な患者家族・地域参画プロジェクトを行つています。この発想はがんセンターにあります。医療開発や医療政策の策定にあたり、PPI(Patient and Public Involvement)の考えのもと意思決定の場に患者さんや一般市民の参画を求める様になっています。医師がやりたい研究開発ではなく、患者さんたちが必要とする医療開発を行うと考えるのです。大阪病院は、実臨床でこれをやりたいのです。何をどうすると良いのか患者さんや市民の方と共に考えていきたいと思います。

患者さんに実際にお話を聞くと、私たちの側からは見えていなかったことが見えてきます。「認められたい」「病院になるためには、一つひとつの意見に誠意を持つて耳を傾けることが大切です。日本人は何事も慎重で控えめです。海外の人と仕事をしているとスピード感が違います。また会議に出て発言しなければ居ないと同じで、海外では次の会議には呼ばれません。このグローバルの時代、今までの国内のやり方だけでは通じません。日本はOECDの国の中でも生産性が低い国です。働き方改革では生産性の向上が欠かせません。一人で仕事(医療)をするのではなく、チームで行いワークライフバランスを保ち同時に安全性と生産性を上げないといけません。そして同じ1時間でも、楽しく仕事するのと、しぶしぶするのは違います。従って職員エンゲージメントは大切です。今年の目標はエンゲージメント向上で、病院や組織に対して愛着を持つて貰いたいと思います。

GIST(消化管間質腫瘍)の研究をしていて分かったこと

GISTの原因解明から、国際共同治験など4つの薬の承認まで関わってきました。今も国際共同研究をしています。海

外の医療者と一緒に研究に携わり感じたのは、これほど言う発見があると、系統的に全ての段階を抑え開発を計画し、迅速に実施すること、競争相手であつても必要であれば手を組み成果を目指すこと、臨床研究のサポート組織が充実し確りしており効率的に実施できることです。結果としてスピード感もかなり違います。

現在、それに加えベンチャー企業の育成や産学協同の開発密度が違うため、ドラッグ・ラグやロスが希少がんや希少疾患領域で生じています。早急に正していかないと、日本はますます遅れます。

産経新聞の電子ニュース「Withコロナ時代の健康相談」(2021) 2023年からはコラム「医心伝診」

コロナ禍中はCOVID-19一色でした。検診を含め他の医療や病気を忘れて欲しいくないという思いや、正しい医療情報に触れて貰いたいという思いがあつて産経新聞のWeb版で連載を始めました。今は大阪版の夕刊で「医心伝診」というコラムを2週間に1回程度掲載しています。玉石混合の情報過多の時代に、最新で正しい医療情報をコンパクトに伝えています。

◆西田 俊郎(としろう) プロフィール

- 1981年 大阪大学医学部医学科卒業
 - 1987年 大阪大学大学院医学研究科博士課程終了(医学博士)
 - 1990年 米国Tufts大学医学部研究員
 - 1994年 大阪大学医学部第一外科 助手
 - 2002年 大阪大学大学院 講師
 - 2004年 大阪大学大学院 助教授
 - 2005年 大阪大学医学部附属病院 病院教授
 - 2009年 大阪警察病院 副院長兼外科系統括部長
 - 2013年 独立行政法人 国立がん研究センター東病院 病院長
 - 2016年 国立研究開発法人 国立がん研究センター中央病院 病院長
 - 2020年 地域医療機能推進機構(JCHO)大阪病院 病院長
- 専門: 胃がん、GIST(消化管間質腫瘍)